

米国カリフォルニア州における コモンコア・州スタンダードの障害のある子どもへの適用について EDge ニュースレター2014年冬／春号より

涌井 恵*・神山 努*・半田 健**・大崎博史*・森山貴史***

(*国立特別支援教育総合研究所) (**宮崎大学, 元国立特別支援教育総合研究所)

(***青森県立八戸第一養護学校, 元国立特別支援教育総合研究所)

要旨: 本稿では、米国カリフォルニア州におけるコモンコア・州スタンダードの障害のある子どもへの適用についての特集記事である「The Special EDge 2014年冬／春号」を紹介した。コモンコア・州スタンダードは、英語/リテラシーと算数・数学における幼稚園から12年生までの大学進学や職業準備に関するスタンダードのセットである。特集記事では、新しいスタンダードの構造は一貫した目標の進展を容易にし、この一貫性は学びのユニバーサルデザインに基づく指導を通して支えられていくこと、重度の認知的障害を含め、アカデミックな内容の個別指導計画 (IEP) の目標はスタンダードに沿う必要があるが、機能的なスキルやライフスキルの重要性もこれまでと変わらないこと、また、コモンコア・州スタンダード (CCSS) は多層支援システム (MTSS) と組み合わせて実施するのが効果的で、通常教育と特別教育双方の担当者の協働が不可欠であることが指摘されている。特集記事の内容より、カリフォルニア州では通常教育の学力向上を目指した教育改革の流れに沿ってスタンダードを取り入れる一方で、障害のある児童生徒の自立と社会生活の充実も重視しつつ教育改革が進められていることがうかがえた。このような取組は、今後インクルーシブ教育システムの充実に向けて、通常教育と障害のある児童生徒のカリキュラムをどのような枠組みで整理し、充実させていくかを検討する際の一つの参考となるだろう。

見出し語: アメリカ合衆国, コモンコア州・スタンダード (CCSS), 個別指導計画 (IEP), 多層支援システム (MTSS)

I. はじめに

本稿では、米国カリフォルニア州におけるコモンコア・州スタンダード [California Common Core State Standards (CCSS)]¹ の障害のある子どもへの適用について書かれた、カリフォルニア州教育部特別教育課 (the California Department of Education, Special Education Division) の出版物である「The Special EDge 2014年冬／春号」というニュースレターの記事について紹介する。

この EDge ニュースレターは、カリフォルニア州の多様性を持った学習者である子ども達に学習到達

の機会を与えるために、意図的な指導と計画ができるように両親、政策立案者、教育者、その他のサービス提供者に情報提供を行い、支援するものである。また、この EDge ニュースレター発行事業は特別教育 (special education) と通常教育の両方に研修、技術援助、教育的リソースを提供することにより、学校や家族とのパートナーシップを支援し、発展させることを目的としたカリフォルニア州技術援助／研修サービス (CalSTAT) の一つとして位置付けられている。

さて、本題に入る前にまず、スタンダードとコモンコアについて簡単におさえておく。Common Core State Standards Initiative の Web サイトのよくある質問のページ (Common Core State Standards Initiative, 2018) では、スタンダードについて以下のように説明されている。

¹ カリフォルニア州では 2010 年 8 月から CCSS を導入し、2012 年に ELD スタンダード (English Language Development Standards) を改訂したほか、教材に関する整備や情報発信等を行ってきた (California Department of Education, 2014)。

(教育的)スタンダードとは、各学年レベルで児童生徒が何をしておくべきで、何をできることが必要かを示した学習目標のことです。コモンコアのような教育基準は、カリキュラムではありません。地方自治体 (Local communities) や教育者は、自らでカリキュラムを選択します。これは、日々の指導のための詳細な計画です。言い換えれば、コモンコアは児童生徒が知っていたり、できたりしなければならないことを示したものであり、カリキュラムは児童生徒がどのようにそれを学ぶかを示したものです。コモンコア・州スタンダードは、K-12までの学年の英語 (ELA) /リテラシーと数学についての教育的基準を示すものです。

また、コモンコアは次のように説明されている。

48の州の教育長と州知事が一堂に会して、英語/リテラシーと算数・数学における幼稚園から12年生までの明確な大学進学や職業準備に関するスタンダードのセットであるコモンコアを開発しました。今日、42州とコロンビア特別区は、自主的にコモンコアを採用して、スタンダードの実施を機能させようと取り組んでいます。また、このコモンコアは、高校を卒業した児童生徒が2年制または4年制のカレッジプログラムの入学資格を取る準備や就職の準備ができていないことを保証するためにも設計されています。

さて、II以降の項では、「The Special EDge ニュースレター 2014年冬/春号」の記事の順にそって要約を紹介する。

II. 障害のある児童生徒のための新しいスタンダードの意味：カリフォルニア州のコモンコア・州スタンダードについて

本項 (II) は、カリフォルニア州教育部特別支援教育課の課長 (Director) である Fred Balcom 氏からの読者への手紙という形で書かれており、その内容の要旨は以下の通りである。

新しいスタンダードの作成者であり、Student Achievement Partners の創設者でもある David Coleman 氏によると、『不平等を排除するという取組は、California Common Core State Standards (CCSS) を推進する主要な根拠の1つであり、この取組の一環として、「障害のある児童生徒は...通常教育カリキュラム内で優れた能力を発揮し、大学や職業を含む就学後の生活の成功に備えるために挑戦する必要があります。』(Common Core State Standards Initiative の Web サイト “Application to Students with Disabilities.” より) ということである。

また、この州スタンダードとこれまでの使い慣れた教育システムについては大きな違いがあり心配が大きいかもしれないが、カリフォルニア州教育省のコモンコアシステム導入事務局の管理者である Barbara Murchison 氏は個別教育プログラム (IEP) が、安定してスタンダードを活用するためのポイントの一つになると指摘している。1975年以来、全米の学校で実施されてきた IEP は、障害のある児童生徒の教師や保護者、そしてしばしば児童生徒自身が定期的に会合し、児童生徒の具体的で明確な教育目標、つまり、知るべきこととできるようになるべきことについて議論し、合意を得てきた。保護者らは、目標を設定し達成するという概念に慣れているので、スタンダードについての公的なシステム内での作業はほとんど新しいことでは無いと言える。

1997年に初めて制定されたカリフォルニア州の(教育)スタンダードは、大まかで表面的なものであったが、今回の新しいスタンダードはそうではない。新しいスタンダードの構造は一貫した目標の進展を容易にする。学びのユニバーサルデザイン (Universal Design for Learning, 以下 UDL とする) の礎である「児童生徒が教材や学習課題を完全に把握するための多様な機会」を通して、この一貫性が支えられていくと Murchison 氏は述べている。

本ニュースレターでは、新しいカリフォルニア州のコモンコア・州スタンダード(以下 CCSS とする)の下での指導方法、IEP、および評価がどのように変化するかを説明する。新しい CCSS は、すべての児童生徒、特に障害のある児童生徒の教育的利益を向上させ、向上させるシステムを作り出すこ

とを約束する。

CCSS に関する児童生徒の進歩を測定するために設計されている新しい学力評価システムと同様、CCSS は特に大きな変化の1つである。これらの変更は、障害者教育法 (IDEA) の元々の意図である統合教育の強化やすべての児童生徒の成果の向上に向けて、教育システムを推進する役割を果たす。学校運営者や教師は、特別教育 (special education) を通常教育カリキュラムにおける児童生徒の成功を支援するために主に設計された支援や指導の配置 (constellation) として再考し、より強めていく機会を得ることができる。最小制約環境 (以下 LRE とする) を考えるということである。我々は基本的に、独自のニーズを持つ少数の児童生徒を除いて、分離した教育環境を避けるように努め、すべての児童生徒に1つの教育システムを導入することを義務付けられている。

最小制約環境における障害のある児童生徒の成功を支援し、維持するためには、UDL を教室の指導に組み込み、学校や地区の教育プロセスに MTSS を組み込むことによって、通常教育の実践と指導介入を改善しなければならない。

CCSS のさまざまな構成要素を実装するために、初等中等教育法を IDEA と整合させることが重要で、この2つの連邦法は両方とも、すべての児童生徒が質の高い教育と質の高い指導に平等にアクセスする必要がある、すべての児童生徒は高い達成基準に到達しなければならない、すべての児童生徒は州全体の評価によって適切に評価されなければならないという一貫したメッセージを発信している。CCSS と新しい州による学力評価については、親、児童生徒、教師、および行政官を対象とした議論が行われている。コモンコアや特別教育担当者向けの最新情報を得るために、定期的に Web サイト <http://www.cde.ca.gov/sp/se/cc/> をご覧頂きたい。今、一緒になって変化を受け入れ、障害のある児童生徒に指導・支援を行うためのコミットメント、エネルギー、そして情熱を新たにする時である。

Ⅲ. 省察：UDL とコモンコア

1. はじめに

本項 (Ⅲ) は、David Rose 博士と Anne Meyer 氏と David Gordon 氏による記事である。David Rose 博士は、発達神経心理学者であり、教育者であり、CAST [the Center for Applied Special Technology] の共同創設者であり、UDL (CAST, 2011) と呼ばれる新しい研究領域を発展させた第一人者である。この記事の要旨は以下の通りである。

コモンコア・スタンダードに関する賛成・反対の議論は、10年ほど前「どの子ども置き去りにしない法」(No Child Left Behind Act, 以下 NCLB 法とする) に関しておきたことを思い出させる。コモンコアのように、NCLB への強い願いや原則は障害のある児童生徒にとって期待されるものであった。あまりにも長い間、障害のある子どもはメインストリームの教育にインクルードされてこなかった。NCLB は障害のある子どもやその他のリスクのある学習者にとって、同年齢児と同じ基準を獲得する初めての機会として歓迎された。そして、これを達成させるための説明責任を学校に担わせた。コモンコアには NCLB と同様の強い願いが表されている。

全ての適切な教育の計画は、明解な目的を立てることから始まる。コモンコアは全ての児童生徒に学んで欲しいと考える最低基準の知識やスキルについてのよりよい考えを提供することによって、目的を定義する一助となる。目的地を明らかにして初めて、我々は計画を描き始めることができるのである。

コモンコアは、我々の期待をカリキュラムとして形作ることが出来るが、これらのスタンダードにどのように児童生徒が達成することをガイドしたらよいかといった、学級担任が日々直面している複雑な問題には答えてくれない。実際 CCSS の Web サイトで明言しているように、「CCSS は児童生徒が学習に必要なことを規定はしているが、どのように先生が教えればよいかを規定はしていない。そして規定すべきでもない。「ゴールには厳格さを、手段は柔軟さ」と米国教育省長官 (U.S. Secretary of Education) の Arne Duncan 氏も述べている。

ここで、UDL が役立つことができるだろう。UDL の原則やガイドラインを発展させるに当たって、

CASTはカリキュラムを4つの基本的な部分(目標, 評価, 方法, 教材)を有するものとして定義している。ここでは, その4つの構成要素について考えてみよう。

2. 目標

目標はスタンダードとは同一ではない。うまく計画されたスタンダードは, 社会の価値観を明確に表しているが, 教師に学級目標を形作り, 到達するための手段を個別化するという余地も残している。スタンダードから明確な目標を導き出すためには, スタンダードの核となる目的を理解し, スタンダードに到達するための手段について柔軟に考えることが求められる。

我々が新しい書籍「学びのユニバーサルデザイン:理論,実践」(<http://udltheorypractice.cast.org>に登録すれば無償)に書いたように, UDLのフレームワークを当てはまると, 目標は, 到達するための手段とリンクしていないので, 教師は目標を達成するために, 複数のやり方(multiple pathways)を提供するような計画を効果的に立てることができる。

例えば, 「老人と海」を読み, その本について知っていることを示すために本のレポートを書くように生徒達が言われたとする。もし目標が「書くこと」というより, むしろその本についての知識を示すことならば, 本のレポートを書くことで明確に求められる学習目標は, 生徒が知っていることを共有する方法を制限してしまっている。

しかし, より焦点を絞って学習目標の設定をすると, 様々な方法が使えることがわかる。この例の場合, アートワーク, ビデオ, 劇化(dramatic performance), 伝統的なブックレポートなど学習者がレポートを完成させるために, 様々なメディア(教材や機器など)を使用することにより, プロットや人物設定, 場面設定などについて自分の知っている知識を示す機会を, 学習者達に, 学習目標を下げるのではなく, 平等に与えることができるのである。

3. 学習評価

州が実施するまとめ的な学力アセスメントは絶大な注目を集めているけれども, UDLアプローチでは,

よく形作られた形成的評価にもっと注目をしてきた。このよく形作られた形成的評価とは, 学習者の進捗を測定するために指導の間ずっと行うものである。これは重要である。なぜならその学習評価は指導目標に合わせてどのように方法や教材を改善したらよいか教えてくれるからである。そして, 意図的に形成的評価を行うことを指導に含めておけば, タイムリーな方法で実施できる。

言い換えると, 最善の学習評価は, ただある特定の児童生徒がどのようにしているのではなくて, どのようにカリキュラム自身がうまく実施されているのかを示してくれる。児童生徒たちが苦戦していたり, あるいは失敗していたりするようなところで, 障害を見つける最初の場所は, カリキュラムの中にある。

また, 継続的なふりかえりとモニタリングをモデル化することによって, 教師は児童生徒の自己調整方略の発達を支援することができ, 児童生徒は自分自身のために自己調整方略を使うことを学べる。このような評価には, 正式なもの(小テスト)もあれば, 非公式なもの(「どのようにやっている?」)もある。どちらの方法による形成的評価とも, カリキュラムはどこで児童生徒を失敗させているのかを見つけたり, 「失敗する」前に児童生徒自身が適切な調整を行ったりする機会を提供する。

4. 方法

適切である指導方法および教材は, 個々の学習者のごく自然な違いやニーズに対してアコモデーションするのに十分柔軟かつ多様である。柔軟ではない学習環境で学ぶことは, そのこと自体に障害が潜んでいる。つまり, 学習への平等なアクセスを児童生徒に提供することはできない。学習への平等なアクセスは, 当然なものであり, 法的にも受けるに値するものであるのにも関わらず。一つのサイズが全ての者にフィットすることは決してない。すべての児童生徒のための最高の基準に到達するために, 複数の多様なアプローチや, (学習活動の)道筋や, 支援が必要となる。

また, すべての学習者が同じ高いスタンダードに到達することを可能にする方法として, 協働の促進

がある。ピア対ピアのサポートは、他者に教えることで自分のスキルや知識を強化するための機会を教える側に与え、また同時に、教えられる側の者は個別的なコーチングから恩恵を受けることができる。テクノロジー・ツールは、時に予期しない方法で、このアプローチを高めることができる。例えば、我々は対面の場面では発言しつけない生徒が、ブログ環境では強力なリーダーとなるのを見てきた。

5. 教材

私たちが進んだデジタル時代に入るほど、固定メディア、特に印刷物が形作っていた効果的な（一部の者は「ゆがんだ」と言うかもしれない）学習者像を思い出すことは難しくなるだろう。ポスト印刷時代の（現代の）学習者は、高品質のオーディオとビデオ、3Dアニメーション、デジタル・グラフィックオーガナイザと用語集、背景情報とソース素材へのリンク、テキストから音声への読み上げなどのような即時の支援に直接アクセスできる。これらの選択肢は、伝統的な教科書を読むことができないか、または正常に解読できない児童生徒にとって、同じ高い基準へのさまざまな道筋を提供する。そして、そのような選択肢は障害のある児童生徒が同級生と同じ高い基準に達するために不可欠である。

CASTでは、UDLブックビルダー、UDLスタジオ、UDLエクステンションなど、多くのことを達成するための無料ツールを提供している²。課題に取り組むことや、行動と表現、児童生徒に提示する情報について複数の選択肢を提示すること（UDLの3原則）は、今日ではずっと実施可能性が高くなった。

おわりに今後の課題について挙げる。コモンコアは新たな課題、すなわち障害のある人を含むすべての児童生徒の教育を改善する新しい機会を提示する。ここ数十年の教育政策の変化は、障害のある児童生徒に障害のない同輩と同じ基準に基づくカリキュラムに参加し、進歩する権利を保証している。それは良いことである。私たちが今行う必要があることは、成功への主要な障壁—1つサイズを全員に当てはめ

ようとするカリキュラム、つまり障害のあるカリキュラム—を解体する方法を見つけることである。

IV. コモンコアのための準備：新しい学力評価

1. 新しい学力評価について

本項（IV）は署名記事ではなく、このニューズレター発行者による記事となっている。この記事の要旨は以下の通りである。

スタンダード、カリキュラム、そして学習評価とは、「何を教えるか」、「どうやって教えるか」、「教えたことをどうやって知るか」である。長年にわたり、研究者はそれらの3つの間の一貫性と整合性（alignment）の重要性を指摘してきた。新しいCCSSとそれに付随する学習評価は、この種の教育の一貫性を前進させることに貢献するだろう。

新しいスタンダードは、内的一貫性を持つ。それらは、児童生徒がある学年から次の学年に移行する際に構築される一連の「発達（progressions）」を伸ばす。具体的には、幼稚園児は一連の重要な概念とスキルを学び始め、それらの概念やスキルは以降の各学年段階で発達的に適切なものに細心の注意を払われながら学年を通して深め洗練されていく。

CCSSが導入・教授されると同時に、IEPを有するほとんどの児童生徒を含めたカリフォルニア州の主な児童生徒は、the Smarter Balanced assessmentsを受ける。これらの総括的な評価は、新しいスタンダードに直接沿う（align）ように作成され、Formative Tools and Practicesのデジタル・ライブラリーに添付される。そのデジタル・ライブラリーは、形成的評価を含む多くの教育的ツールとリソースを提供する予定である。the Smarter Balanced Consortiumは、「児童生徒のパフォーマンスに関する良い情報を教師の手に渡すことは、教示に大きな影響を与え、結果として児童生徒の学習に大きな影響を与える」という信念に基づいてこれらのリソースを設計した。

重度の知的障害のある児童生徒には、CCSSに沿った代替達成スタンダードに関する評価に基づいた多様なプロジェクトである the National Center and

² CASTのWebサイト www.cast.org/learningtools より無料でダウンロードできる。

State Collaborative (NCSC) によって作成されたものと同様の代替評価を受けることができる。NCSC 評価は、カリフォルニア州ではまだ公式に採用されていないが、現在試行されている。

新しい代替評価の目標は、児童生徒がより高い学業成果を達成し、高等教育の選択肢や地域社会での生活の準備のために高等学校を離れることを保証する。(NCSC リソースについては原文10ページを参照)

2. アシスティブ・テクノロジー

the Smarter Balanced assessments は、障害のある児童生徒により良いサービスを提供する目的を持ち、紙と鉛筆のテストではできない多くのことができるという新しいテスト技術の利点を持っている。新しい技術によって、教師が指導や支援について決定することを手助けするために、テストから児童生徒の進捗についての情報をすぐに伝えることができる。おそらくこれらの新しい評価の最も革新的な側面は、コンピューターのアシスティブ・テクノロジーを使用する方法を含む点である。これにより、児童生徒が直接応答するテストのプロセスを通してテスト問題を調整することを可能にし、各児童生徒の問題のセットに個別的な調整することを可能にする。このような適応テストのもう一つの利点は、上級生と下級生の学年を超えて情報を提供することができ、児童生徒のパフォーマンスに関する正確なレベルを報告することができることである。端的に言えば、新しい評価は、すべての児童生徒にとってより正確で有用なスコアを提供するだろう。

3. アコモデーション

新しいテストとそれらに採用されている技術は、成績の低い児童生徒や障害のある児童生徒に、様々なユニバーサルなツールや支援、調整を通じて自分が知っていることやできることを示す新しい機会を与える。そのほとんどは、評価のインターフェイスに直接組み込まれている。デジタルノートペーパーやスクラッチペーパーのようなユニバーサルツールがすべての児童生徒に提供される。適切なときに、指定されたリソースや支援（翻訳されたポップアッ

プ用語集や辞書など）が児童生徒に提供される。また、各児童生徒と各評価の目的を知っている教職員は、適切なテストに関する支援を選択することができる。そして、IEP や504プランに記載されたアコモデーションを持っている児童生徒の場合、学力テストにおいて利用することができる。これらのツールには、点字や字幕なども含まれる。

4. リソースの共有

新しいスタンダードや評価の開発において、すべての児童生徒の利益のためのリソースや人材を確保するために、各州と共に協力し合っている。新しいリソースや方略が開発されると、参加している州は指導と評価を強化するためにそれらを共有し続けるだろう。

5. 準備

The Smarter Balanced assessments を受けるために、児童生徒は基礎的なコンピューターやワープロに関するスキルを理解する必要がある。保護者や教師は、児童生徒に学校や家庭、地域の公立図書館でこれらのスキルを練習する機会を与えてほしい。キーボードを打つスキルやコンピュータースキルの発達は、IEP に書くことができ、学校だけでなく多くの高等教育や就労の場面で役立つ。一部の児童生徒は、すでに何らかのオンラインテストに精通しているかもしれない。そして、the Smarter Balanced assessments と NCSC を練習するテストは州から提供されている。しかし、新しい学習評価を児童生徒に準備するための最善の方法は、CCSS を教えることである。

6. 結果

カリフォルニア州のような大きな州や公立学校のような多層的なシステムで何かを展開することは挑戦的である。しかし、州がより洗練された、つまり一貫性のあるスタンダードや学習評価のシステムを成長させるにつれて、カリフォルニア州の障害のある児童生徒は、「テストされた物を教えられる」。そして、テストされて教えられたものは、実際に児童生徒が成人として成功するために知る必要があり、できなければならないものであるということを実

なものにできるだろう。

V. コモンコアのための準備：専門性の向上

この項（V）も署名記事ではなく、このニュースレター発行者による記事となっている。この記事の要旨は以下の通りである。

CCSS の導入により、カリフォルニアの障害のある児童生徒を含むすべての児童生徒に、大学、職業、地域生活の準備指導をする、高質な、スタンダードベースの指導が約束された。この約束が認識されたため、特別教育の教員を含むすべての教員が、CCSS を理解し、自らの指導に CCSS を組み込むためのトレーニングを受けなければならない。事実、現在、専門性向上の不十分さが、ニューヨーク州が CCSS の投入において直面している困難の著しい理由として例証されている。

特に、特別教育の教員は、児童生徒の目標を新たなスタンダードに揃える（align）することにおいて、目標を修正するための最適な方法に関するガイドラインを必要としている。この知識は今生じたのではない。また、通常教育の教員が受けたトレーニングから流れ出た訳でもない。学区の専門性向上のための研修にすべて参加するだけでなく、豊富な専門性向上のための機会は、パソコンのキーをクリックすることで利用できる。以下のリストは、オンラインで利用でき、コモンコアを適切に実行することを理解し、準備することに関して、教員の一助となるためにデザインされている情報やトレーニングの、少ないが中核的な例を特集しているページである。（URL は原文のまま引用している。）

●全ての方向け

○カリフォルニア教育局

<http://www.cde.ca.gov/re/cc/>

○カリフォルニア CCSS 専門的学習モジュール

[http://myboe.org/portal default/Group/Viewer/GroupView?action=2&gid=2996](http://myboe.org/portal/default/Group/Viewer/GroupView?action=2&gid=2996)

○The Smarter Balanced Assessment

<http://www.smarterbalanced.org/k-12-education/teachers/>

○州の学校事務局長委員会が作成したコモンコア実行動画

http://www.ccsso.org/Resources/Digital_Resources/Common_Core_Implementation_Video_Series.html

○サクラメント教育事務所におけるカリフォルニア CCSS の Web サイトにある e スタンダード

<http://scoecurriculum.net/estandards/>

○Student Achievement Partner による「算数数学の CCSS—数学の指導における移行と示唆—」

<https://itunes.apple.com/us/itunes-u/common-core-state-standards/id522706351>

●特別教育担当者向け

○カリフォルニア教育局における特別教育の教員による CCSS シンポ

<http://cde.videosscc.com/archives/120213/>

○「CCSS—その違いはどこに適合するのか？」（ASCD の Web サイトにおける Carol Ann Tomlinson の Web カンファレンス）

<http://www.ascd.org/professional-development/webinars/tomlinson-and-britt-webinar.aspx>

○ナショナルセンターと州の協働

https://wiki.ncscpartners.org/mediawiki/index.php/Main_Page

○The Council for Exceptional Children（学術団体）

http://www.cec.sped.org/Professional-Development/Webinars/Recorded-Webinars/Common-Core-State-Standards?sc_lang=en

○国立障害児普及センター（NICHCY）

<http://nichcy.org/schools-administrators/commoncore#educators>

○学習障害児に対する CCSS の実施

<http://www.rtinetwork.org/professional/forums-and-webinars/forums/rti-webinar-implementing-common-core-state-standards-students-learning-disabilities>

●行政担当者向け

○児童生徒の大学準備や就職準備のための専門的学習の変化—コモンコアの実施

<http://learningforward.org/publications/implementing-common-core#.Uv0uAf2DT0t>

○全国小学校管理職協会 (NAESP)

<http://www.naesp.org/common-core-state-standards-resources#webinars>

○CCSS の実施—中等学校の校長の役割— (Achieve 作成)

<http://www.achieve.org/publications/implementing-common-core-state-standards-role-secondary-school-leader-action-brief>

VI. コモンコアのための準備：個別教育プログラム (IEP)

1. はじめに

本項 (VI) も署名記事ではなく、このニュースレター発行者による記事となっている。この記事の要旨は以下の通りである。

州の新しいスタンダードへの移行により、個別教育プログラム (IEP) の持つ個別性という性質は、コモンコア・スタンダードを満たす必要性から失われるのか、(生活に活かすことを目指した) 機能的な訓練と行動に関する目標は減少するだろうか、あまりにもたくさん児童生徒のことについて尋ねられることになるのか、特別教育および通常教育担当者は、新しいスタンダードに基づいて目標を作成し評価するのに適切な準備をしていますかといった疑問や懸念の声が挙がっている。最初の三つの質問に対する答えは「いいえ」で、IEP は基本的に同じであると言える。

2. スタンダードにもとづく IEP

障害者教育法 (The Individuals with Disabilities Education Act) は、IEP を義務付けているが、CCSS は、この法的要件について何も変更しない。また、カリフォルニア州では、州スタンダードが確立された1997年以降、スタンダードに基づいた IEP を開発し使用している。西部地区の特別プロジェクトのアシスタントディレクターの Kevin Schaefer 氏によれば、まず、IEP チームが各学年レベルでのスタンダ

ード (現在のコモンコア) を深く理解することから IEP の作成プロセスは始まる。この理解と共に、IEP チームは、各児童生徒が何を知っているか、学年レベルに関連してどのように機能しているかを評価する。この際に形成的学習評価のデータだけでなく、フォーマルやインフォーマルな学習評価と教師の観察を使用し、現在のパフォーマンスレベルを見て、個々のニーズを特定していく。IEP チームは、来年度までに児童生徒が達成する必要がある有意義で測定可能な目標を立てる。各児童生徒の特別教育の個別のプログラムと関連サービスは、それらの目標を達成するために造られていく。この後、IEP チームがこれまで何年にもわたって行ってきたように、多数の評価尺度を通じて児童生徒の進捗状況が定期的にモニターし、進捗の結果に応じて目標を見直す。

3. 新しい点

CCSS ではスタンダードの数は少なくなっており、内容と学習の両方において、その深みと質一つまり、批判的に考える、問題解決する、事実に基づいて情報を評価するといった能力を重視していて、より詳細な指導と共に多くの教授時間の配分や教材の工夫が可能となっている。このことは、通常教育担当者と特別教育担当者が、協働する完璧な機会を創ってくれると共に、欠陥モデルから児童生徒の学習改善に焦点化する機会を IEP チームに与える。

4. 目標を揃える

重度の認知的な障害を含め、障害のある児童生徒のためのアカデミックな IEP の目標は、新しいスタンダードに合わせなければならない。重度の認知障害のある児童生徒がこれまでに学べなかったアカデミックスキルや知識を意味のある方法で習得し活用できることが示されており³、通常教育カリキュラムへのアクセスは卒後の成功の予測因子の1つであることが明らかになっている。

一方、行動、社会的-情緒的な困難、および特定のライフスキルに対処する機能的な目標は、IEP の非

³ Ensuring All Students with Disabilities Progress.
<http://www.cehd.umn.edu/research/highlights/NCEO/>

常に重要な部分のままであり、これらの目標はCCSSと整合する必要はない。機能的な目標はアカデミックなアクセスと成果を支援する上で中心的な役割を果たす。

Schaefer氏らはCCSSに基づいたIEPの目標作成のための12項目から成るチェックリストを開発した。そのうち、「自立に向けての進展はありますか?」というのが最も重要であると述べている。

5. 支援の統合

行動的、または機能的な学習の目標とアカデミックな目標は統合されることが重要である。どのような支援を考えるにしろ、アカデミックな事柄と行動は別々に分けられるものではない。IEPは児童生徒全体についての青写真でなければならないとShaefer氏は述べている。

6. 保護者の役割

保護者は誰よりも自分の子どものことをよく知っている重要なIEPチームのメンバーである。IEPミーティングを始めるには、児童生徒の長所について話し文書化することが大切であり、保護者はその会話を導くことができる。しかし、一部の障害のある児童生徒の保護者は、子どもは苦勞すべきではないと感じるかもしれないが、苦勞も学習の一部であると保護者が理解することを助けるために、我々はそのような考え方を変える必要がある。

今回の改訂は我々が児童生徒にとってより良い仕事をする機会である。特別教育担当者、通常教育担当者、そして保護者で積極的に協力し合い、変化を受け入れよう。コモンコアは、誰もがより高いレベルの達成に向かうよう挑戦している。そして、「誰もが」には、障害のある児童生徒を含んでいるのである。

VII. 新しいスタンダードと多層システム：完璧にフィットさせる

1. はじめに

本項(VII)も署名記事ではなく、このニュースレター発行者による記事となっている。この記事の要旨は以下の通りである。

2. MTSSとCCSS

障害のある児童生徒を含む、全ての児童生徒の新しいスタンダードにおける成功を実現するために、カリフォルニア州は、学校の指導・支援を組織化する調整的なアプローチである、多層支援システム(Multitiered System of Supports, 以下MTSSとする)を採用してきた。MTSSは、全ての児童生徒が学ぶために必要な指導や指導の支援を推進するための、データとエビデンスに基づく実践の使用を州が支える一つの方法である。

この記事の中でMTSSについての何か新しい記載があるとしたら、それは、MTSSは通常教育において始まるシステムであり、全ての児童生徒の支援のためのこの全校的システム・アプローチの必要性をカリフォルニア州が認識しているということである。カリフォルニア州教育局は、学区が学校区、学校、および児童生徒の全レベルで、階層的な支援システムに移行するのを支援するために設計された新しい専門家学習モジュールを開発した。つまり、MTSSは、最新版の英語技術科の基盤となることができるのである。

MTSSとCCSSの組み合わせは、指導を進め、学習を改善する方法である。カリフォルニア州は先駆者の教訓から恩恵を受けている。カンザス州の小・中学校23年間で教鞭を執り、そしてMTSSがまれにしか適用されず、まだ新しいアイデアだったとき、MTSSを実装する小学校の校長として8年を過ごし、現在MTSSの構築を支援するカンザス州多層システムのコアチームのメンバーであるJames Baker氏は、自身の経験から、MTSS-CCSSのコンビネーションに対して「すべての教師が合意に達し、すべてのリソースが児童生徒のニーズを満たすために整えられるように、指導を進め、学習を改善する方法」と確信するようになった。

MTSSとCCSSは効果的な指導を促進する4つの中心的な特徴を共通して持っている。それは、「アカデミックおよび行動的な目標を明確にする」、「ユ

ニバーサルデザインのカリキュラムと教授法」,「教えられ、勉強し、学習されたものとテストされるものが順序よく並んでいる」,「指導や介入に関する決定を導く形成的評価(正式および非公式)による定期的な進捗モニタリングの4つである。また、障害のある児童生徒にとって、うまく実行された階層的な支援システムが以下の5つを確実に守ることが特に重要で役立つ。1. 通常教育の教室で指導を可能な限り受け、2. よりよい指導となるような方略が埋め込まれている強力で核となる指導を受け、3. カリキュラムを習得するために児童生徒が必要とする学習評価データに基づく介入が提供され、4. 通常教育の同年齢児と同じスタンダードで教えられ、5. 障害ラベルではなく、ニーズに基づいた指導と支援等が提供されることの5つである。

3. 協働

前述の Baker 氏は、通常教育担当者と特別教育担当者の協働を、効果的な MTSS の中心であり、新しいスタンダードの実装に不可欠なものであると見ている。また、「私たちの (MTSS) システムでは、すべてのサービス、支援、および指導は必要に応じて行われています。全ての児童生徒はコア指導を受け、どの児童生徒も第2層~第3層の支援を受けることができます。特別教育の教師は特別教育の児童生徒へ働きかけるだけではありません」と述べている。MTSS における通常教育と特別教育の連携によって、その児童生徒に特別教育が必要な限りずっと、特別な指導・支援等が児童生徒に与えられることを保証することも可能となる。MTSS システムでは、誰がどの層の支援を受けるのかは流動的であり、障害ラベルと教育の場の措置が与えられることはない。カンザス州では、現在、州の公教育担当教員を対象に州全体で協働教授 (co-teaching) の研修を実施し、全ての教師は問題解決のための手続きやデータの使用について訓練される。

4. データ

カンザス州幼児局長で、州の大部分の学校と地区における MTSS の実装の最前線に立つ Colleen Riley 氏は、データを使用して意思決定を行うことは、教

育者が行うことの一部ですが、学校が MTSS を実装している場合、すべての教育者がデータを見て、その決定を下すという共同作業プロセスが MTSS によってサポートされると言う。また彼は、孤立は「教師に多大な負担」を与える考え、彼の経験から、MTSS では学校チームによるデータと共同意思決定に重点を置くので、教師が決定しなければならない孤独な負担の一部が取り除かれること、そしてそのデータは指導を改善することを指摘している。さらに Riley 氏は、MTSS は児童生徒の成績向上のためのシステム以上のものであることを強調している。大人がデータを使って一貫してアカデミックな学習と行動の両方の問題に対応できるように設計されているため、システムはすべての児童生徒のニーズを満たすためのサポートと介入を備えていることを強調している。学問と行動の両方において、指導、カリキュラム、評価の統合と一貫性が重要であると彼は言う。

これに対し、MTSS と CCSS は、この種の一貫性を促進するように設計されている。両方を実装することは、Riley 氏の言葉を借りれば、「簡単なことではない。しかしそれは良いことだ」ということだ。

Ⅶ. まとめ

本稿では、米国カリフォルニア州におけるコモンコア・州スタンダードの障害のある子どもへの適用についての特集記事である「The Special EDge」(カリフォルニア州教育部局の助成により発刊)を紹介した。コモンコア・州スタンダードは、英語/リテラシーと数学における幼稚園から12年生までの明確な大学進学や職業準備に関するスタンダードのセットであり、米国の42州とコロンビア特別区で採用されている。また、スタンダードとは、各学年レベルで児童生徒が何を知っておくべきで、何をできることが必要かを示した学習目標のことである。

この特集記事では、通常教育のカリキュラムに関連する新しいスタンダードの構造は、一貫した目標の進展を容易にするものだが、この一貫性は学びのUDLの礎である「児童生徒が教材や学習課題を完全に把握するための多様な機会」を通して支えられて

いくこと、重度の障害の障害を含め、障害のある児童生徒のアカデミックな（教科的な）内容の個別指導計画（IEP）の目標はスタンダードに沿ったものでなくてはならないが、生活に活用するための機能的なスキルや自立生活に向けたライフスキルの重要性はこれまで同様変わらないことが説明されている。ただし、教科学習と行動面の目標は分けられるものではなく、両者が関連性を持って統合された IEP を立てることが重要であるとも指摘している。アシティブ・テクノロジーを活用した合理的配慮も可能なオンラインテストが実施されること、スタンダードが円滑に教育現場に適用されるために教職員の専門性向上のための Web セミナー・映像教材・資料が用意されていること、MTSS-CCSS の組み合わせが「すべての教師が合意に達し、すべてのリソースが児童生徒のニーズを満たすために整えられるように、指導を進め、学習を改善する方法」であること、またその効果を上げるためには、通常教育担当者と特別教育担当者の協働が不可欠なものであることがこの特集記事において指摘されていた。

これらのことから、カリフォルニア州では、通常教育の学力向上を目指した教育改革の流れに沿って、スタンダードを取り入れる一方で、機能的なスキルやライフスキルといった障害のある児童生徒の自立と社会生活の充実も重視しつつ教育改革が進められていることがうかがえた。これは、今後、日本のインクルーシブ教育システム推進に向けて、通常教育のカリキュラムと障害のある児童生徒のカリキュラムをどのような枠組みで整理し、充実させていくかを検討する際の一つの参考になる考え方となるだろう。

引用文献

- California Department of Education. Common Core State Standards: Systems Implementation Plan for California, April 2014.
<https://www.cde.ca.gov/re/cc/documents/ccssimplementationplan.pdf> (アクセス日, 2018-01-04)
- California Department of Education, Special Education Division (2014). The Special EDge 2014年冬／春号.

- <http://www.calstat.org/publications/pdfs/2014winterSpringedge.pdf> (アクセス日, 2018-01-04)
- CAST (2011). The Universal Design for Learning Guidelines.
http://www.udlcenter.org/sites/udlcenter.org/files/updatedguide-lines2_0.pdf (アクセス日, 2018-01-04)
- Common Core State Standards Initiative. Application to Students with Disabilities.
<http://www.corestandards.org/wp-content/uploads/Application-to-Students-with-Disabilities-again-for-merge1.pdf> (アクセス日, 2018-01-04)